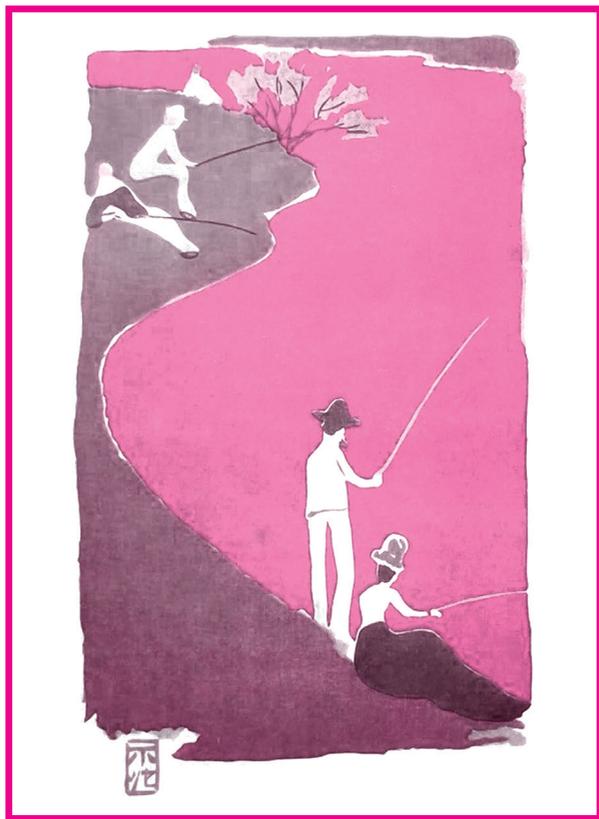


俳句誌

一月号



花鳥諷詠

1月号 (442号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和7年1月■第442号 ————— 目次

新年のことは……………岩岡 中正 …… 2

花鳥諷詠選集……………山田 佳乃 …… 5
佐伯 緋路 …… 7

一頁の鑑賞……………大橋 一弘 ……10
池末 朱実 ……11

この人の作品……………大西としみ ……12

卯浪……………13

虚子研究 『六百五十句』研究 (59)……………14

木村享史『句集 春光』虚子の光に導かれ ……井上 泰至 ……21

支部だより (九州支部)

事務局から見た九州の動き……………山下しげ人 ……24

新刊紹介……………27

風報……………28

地区行事開催日程表……………31

編集後記……………32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

花鳥諷詠選集

山田佳乃選

特選五句

遠きほど青き鳥影瀬戸の秋

高松 渡部 全子

有の実を剝く間の喉の渴きかな

太宰府 白石 照子

落葉松に霧の残してゆきし色

大牟田 介 弘 紀子

栗を剝くちから十指に残りをり

美作 駿 河 亜 希

べつたらを飽きるほど見て飽かぬ市

横浜 夏 野 猫 宙

二句短評

一句目——空中の微粒子が、可視光の中の波長の短い青い光を四方八方に反射するため、山影が青く見えるとか。遠ければ遠いほど青く見えるという作者の発見と遠近に散らばる瀬戸の鳥々の景がすつきりと描かれている。

二句目——梨のたつぷりとした果汁を「喉の渴き」という措辞で逆に思わせる。梨の果汁が滴れば滴るほど自身の渴きを感じるのだ。梨という季節がよく効いている。

入選六十句

放牧の花野の中のチーズ小屋 金沢 三島由紀子

演台に小諸の紫菀活けられて 十日町 小川 則子

薄紅葉た走る水を跨ぐ橋 糸島 藤原 泰子

兄の忌と墓碑を洗へば小鳥来る 京都 奥田まゆみ

広々と雲仲秋の姿成す 鹿児島 松下 正拳

雨音に母の繰り言聞く夜長 熊本 児玉 胡餅

累々と桃吹く畑や落暉急 神戸 前田 容宏

涼新た水平線を引き直し 浜田 田中由紀子

蓑虫の太りし風の揺れやうに 姫路 黒田千賀子

奥能登に悲しみ残す秋出水 金沢 森田 康夫

秋の野の先頭の声よく通り 堺 杉山千恵子

妻逝きしのちの歳月花八ツ手 神戸 上岡あきら

鎖場の梯子づたひに山葡萄 大阪 上西左大信

鷹柱流れて一羽又一羽 阿南 かつせ千津

峡の日へ二階三方柿吊す 静岡 曾根 満

秋薔薇名は薄倖の人ばかり 吹田 小井川和子
 枝折戸を押しして良夜のただ中に 金沢 松田とも子
 秋の蝶風に消えてはまた現れて 高松 信里由美子
 堰すでに朽木となりし秋の川 鹿児島 西村 セツ
 秋草や風に吹かるるための丈 京都 山崎 貴子
 しろがねにくがねに城の風は秋 松原 加藤 あや
 秋の蟬風のすき間に声落とす 熊本 西 美愛子
 平凡な暮しに届く今年米 うきは 大力 妙子
 侵入の猪に菜園あきらめし 福山 池上 幸子
 露の径やつとここまで伸ぶる試歩 高松 大山 孝子
 叱られし子にも言ひ分青林檎 熊本 矢澤 幸乃
 幾筋も風の道生む松手入 洲本 高野 さち
 野分あと早も聞ゆる槌の音 福岡 沖永 洋美
 咲くものの色を競はず爽やかに 芦屋 長安 悦子
 花野ゆく父母を探しにゆくごとく 熊本 隈部 輝子

ただ考へてゐるだけの冬支度 金沢 村上 秀吾
 避難所の窓明々と台風裡 神戸 中井 陽子
 一筆に長き稜線月白し 富士吉 鈴木 文代
 屋上の吹奏楽部秋高し 高知 駒木 基克
 勅使門出入り許され松手入 西宮 山之口倫子
 新米を持ち来る叔父の国訛 東京 柿崎 典子
 晴れ十日続き熟柿の満つる頃 大牟田 本田 守親
 県境の山肌なべて葡萄棚 福島 伊藤とし子
 稲扱の親子の息の揃ひけり 大牟田 前原八寿之
 手間暇の掛かる幸せ栗御飯 伊賀 松村 咲子
 秋灯や卓袱台見ゆる古本屋 横浜 永澤 功
 鉦叩一打の音に迷ひなく 東大阪 中田 豪起
 秋耕や晴れわたる日の鋤運び 福知山 松山 牧子
 秋晴や富士見て降りる観覧車 香川 三宅久美子
 レコードに息づくノイズ秋深し 高松 郡 としゑ

親方は二階窓より松手入 東京 黒島 流世

波音のかすかに夜の鰯雲 岡山 大野 文子

秋簾我が家の色となつて来し 佐賀 松丸 昭子

新しき 駅 大空に 鰯雲 松山 門田 智子

一礼し 四万十川の 鮎の 漁 神戸 宮田マスコ

峰寺の 長き 残暑を 断ちし 雨 鳥取 宮脇 典子

芋水車かけて 無人の 山家かな 倉敷 中田 鈴江

拵着ての つべらぼうの 案山子かな 島原 吉田 章子

薄もみち 昨日の 画布に 書き足して 東京 藤森 莊吉

男爵も 愛でし 高窓木の 実降る 武蔵村山 福留 和江

十三夜 真珠 一粒 胸もとへ 東京 関 千恵子

馬追や 夫の 長風 呂確かめに 宇部 爲近 正子

奥能登の 松茸 山も 地震の 傷 金沢 伊東弥太郎

秋 高し 動物園を 肩車 鹿児島 坂本 啓子

団栗を 大人も 拾ふ 佳き日かな 横浜 秋間 玲子

佐伯緋路選

特選五句

子の機影早も良夜にとけ込みぬ 福岡 梶原 敏子

立ち上がるための 躓き運動会 神戸 石田 裕美

涼新た 水平線を 引き直し 浜田 田中 由紀子

名月を 砕きて 鷺の 着水す 石川 宮下 末子

秋空の ぱきつと 割れるかも 知れぬ 横浜 島村 美沙子

二句短評

一句目——飛行機で旅立つ我が子をデッキで見守る親。「早も」に一抹の寂しさを残しつつも、機影が消えた後に美しく光る月は子の未来の象徴であり、子の幸せを願う作者の心象でもある。「とけ込む」の措辞も秋の冷ややかな空気に合う。

二句目——「躓いたから立ち上がる」子供、という運動会の平凡な景を逆転の発想で切り取ることで虚を突かれたような新鮮な驚きが生まれる。逆境なくして成長なし。人の一生も、実は長い運動会なのかもしれない。

入選六十句

林檎むく今は空気の如二人 伊万里 大久保花舟

月草に零るる空の青さかな 浜田 福本 正巖

雨音に母の繰り言聞く夜長 熊本 兎玉 胡餅

初鳴の青空連れて来りけり 大分 峯戸松祥子

秋の蝶愛の形のまま空へ 大川 中原南大喜

露の世を生きぬく術の罪と罰 泉大津 多田羅初美

一刷けの雲を浮かべて水澄める 岡崎 富田 征也

丹頂を点描に見る蝦夷大地 半田 稲葉 京閑

宿下駄の夜露に湿る鼻緒かな 八尾 米澤 悦子

灯下親し声に出し読むみすゞの詩 福岡 深瀬 直治

草の実の弾けて音のあるごとし 山形 布川 國雄

らしくない元氣だせよとねこじやらし 宗像 井上真知子

くれなるのどこかが冥き秋の薔薇 鹿児島 永井 紀子

堰すでに朽木となりし秋の川 鹿児島 西村 セツ

二三本抜け出してをり芒むら 東京 清水千鶴子

大野分杉の歴史を倒したる 太宰府 持永真理子

コスモスと風のお喋りゆらうふふ 長岡 岸 祥子

公園の錆びし遊具や虫集く 福山 濱田喜代恵

かけつこの拍手おひかけ運動会 福岡 青木さえ子

遠きほど青き島影瀬戸の秋 高松 渡部 全子

身の内に溜まる水音崩れ籜 荒尾 大川内みのる

ひと雨に始まる庭の薄もみぢ 南相馬 高野かつみ

叱られし子にも言ひ分青林檎 熊本 矢澤 幸乃

倉町の車夫の健脚秋高し 倉敷 鴨井 愛子

明眸の女医爽やかに退院告ぐ 小樽 遠藤 嶺子

稲刈つて田は広くなる軽くなる 京都 大黒ひさゑ

ただ考へてゐるだけの冬支度 金沢 村上 秀吾

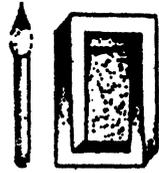
城山の空震はせて木の実落つ 野々市 辻 文江

月の砂漠唄ひて帰る良夜かな 福山 小林 翠子

避難所の窓明々と台風裡 神戸 中井 陽子

飛行機が低く飛ぶ音秋微雨 稲敷 杉崎 淑子
 一筆に長き稜線月白し 富吉田 鈴木 文代
 蟪蛄の言ひたきことのある構へ 安中 多胡恵美子
 小鳥来る湧水四方をあふれゐて 東京 勝又 洋子
 殿はリュックに芒挿してゐる 山口 西 やすのり
 栗を剥くちから十指に残りをり 美作 駿河 亜希
 曲水に秋風のみちあらはるゝ 東京 川原 千秋
 うたた寝の夢の底なる鉦叩 太宰府 川路 泰子
 蜜吸ふや虻は日差しにぶら下がり 堺 吉田 敦子
 踏み入りし歩が飛ばせたるばつたかな 高松 肥塚 英子
 秋祭小さき巫女の紅を引く 刈谷 稲垣三千代
 蜻蛉の影をつくらぬ速さかな 福岡 有田真理子
 秋天へジャングルジムの声抜ける 米子 中村 襄介
 秋の野の濡るるは星の涙とも 神戸 明石 裕子
 開店のイーゼルに来る小鳥かな 高島 貫野 浩

秋晴へ扉を開ける車椅子 京都 奥西 真穂
 秋水を湛へ瞳のやうに湖 袋井 湖東 紀子
 還暦と卒寿の交はず菊の酒 福山 杉原 芳子
 レコードに息づくノイズ秋深し 高松 郡 としゑ
 生きるとは力抜くこと木の実降る 春日 志鶴 富生
 農小屋に野良着大鈍唐辛子 流山 高良 楽水
 元寇の浜の静けさ新松子 長崎 松本 洋子
 秋茄子の小さく濃き紫を挽ぐ 大村 春日 玉子
 秋鯖の弾力に刃を入れにけり 三田 吉村 玲子
 南北の遊廓は失せ年尾の忌 札幌 増田 植歌
 ポケットに木の実鞆に虚子俳話 八尾 浅井 祥多
 書の中の我も探偵秋灯下 東京 岩村 恵子
 黄の濃さを選びて蜜柑むいてをり 横浜 淨園 英穂
 朝光をしだれて葛の花高し 大牟田 森永 清子
 通学の駅に林檎と恋を置く 福岡 橋口 貴美



編集後記

雪の日や雪のせりふをくちずさむ

中村吉右衛門

虚子門には、昭和の名優がいた。この「雪のせりふ」、私は歌舞伎にも引かれる謡曲「鉢木」の、「ああ降ったる雪かな。如何に世にある人の面白う候ふらん（中略）あら面白からずの雪の日やな」を想起する。成功者には満足の雪も、貧しい人間には哀しみの雪となる。作者は今号の『六百五十句』研究にも登場するが、能や歌舞伎の科白と俳句の調べには通じるものがある。背景を生む調べとでも呼べばよいか？

○今年の「花鳥諷詠」の編集の柱は、地方記事の充実と、SNSとの連携だと先月号でご案内いたしました。各地の活動の状況をより具体的にご紹介し、「花鳥諷詠」の新たな縁の礎にしたいと考えております。

○九州は、虚子門の閨秀星野立子と双璧の中村汀女や、虚子最大のスポンサーだった赤星水竹居所縁の地です。こうした虚子門の「伝統」から学ぼうという、地道な活動にもご注目ください。「縁」には過去からつながる縦軸と、今の時代を生きる者同士の横軸とがあります。本誌がそれをつなぐ場となることを願うものです。

○このところ、協会を代表する作者による句集の刊行が相次いでいます。従前の新刊紹介ではとても取まらない充実した内容となっていますので、しばらくページ数を割いてご紹介していく所存です。本年もよろしくお願い申し

上げます。

(井上泰至)

●花鳥諷詠選題者予定

| 掲載 | 締切り | 選者 |
|-----|-------|--------------|
| 4月号 | 1月20日 | 岩岡中正 |
| 5月号 | 2月20日 | 山田佳乃 |
| 6月号 | 3月20日 | 岩岡中正 如月真菜 |
| 7月号 | 4月20日 | 山田佳乃 高峰武 |

花鳥諷詠一月号(通巻第四四二号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和七年一月一日

発行人 岩岡 中正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シャンブル笹塚二丁目一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二